

# 1年生の「基礎ゼミ」ってどんなことするの!?

ゼミとはゼミナール (Seminar) の略です。ゼミナールの元々の意味は、「種をまく苗床」という意味だとか。教室で行う講義とは異なり、ゼミでは、教員と少人数の学生が、共に語り、学ぶ機会を持ちます。これまでゼミは、上級生を対象とすることが一般的でした。でも実際に、最も少人数教育を必要としているのは、大学に入学したばかりの1年生ではないかという考えから、経済学部では2003年から、1年生を対象とした基礎ゼミを行っています。共に語り、学ぶためには、共通のテーマが必要となるので、多くのゼミではテキストを決めています。基礎ゼミのテキストには、身近な生活問題に関するものが多く使われています。この後、学年が進むに従い、テキストも専門的な経済学に関するものへと変わっていくのです。報告するのは学生の役割。決められたテーマに沿って論点をまとめ、問題提起をしていきます。

でも勉強だけがゼミの目的ではありません。コンパ、ソフトボール大会と、遊びのメニューも盛りだくさん。入学したばかりの学生にとって友達作りの場でもあります。今回は、そんな基礎ゼミについて特集しました。

**向 貴生 (むかひ たかき)**  
 弟子屈高校出身  
 公務員試験に強い大学として、当大学経済学部を選択。小中高とバレーボールに燃え、入学後もバレーサークルに所属するスポーツ派。将来は、身体を使って活躍できる公務員志望。

**河上 彩乃 (かわかみ あやの)**  
 江別高校出身  
 地歴公民の教員免許取得を目指して教職課程を履修。基礎ゼミでは「いじめ」をテーマとする案を積極的に提案するなど、幅のある教師になることを目指している。

**嵯峨 和幸 (さが かずゆき)**  
 札幌平岡高校出身  
 高校時代、生徒会活動で培われた行動力と実行力、勉強、サークル(放送部)、アルバイトと、マルチに活躍。基礎ゼミにおいても、積極的な意見交換に挑む。

**小田 悠 (おだ はるか)**  
 俱知安高校出身  
 大の野球好きで、高校時代からマネージャーを経験し、現在も、準硬式野球部に所属。より専門性の高い経済学を学び、将来的には金融関係への就職を目指す。

# 研究室の窓から

## 近年におけるFTA活発化の要因とその経済効果



笠嶋 修次 | 経済学部経済学科教授 (かさじま しゅうじ)

自由貿易協定 (FTA) とは、特定の国あるいは地域間において相互にモノの輸入関税やサービス貿易の障壁を削減・撤廃する貿易協定で、その第1号は1957年に設立された欧州経済共同体 (EEC) です。広い意味での地域貿易協定は1990年代以降世界的に急増し2007年3月時点で183になっています。その圧倒的多数はFTAであり、なかでも欧州・地中海地域および中欧・東欧・CIS諸国でのFTAが多くなっています。また近年は米国もFTAに積極姿勢をみせています。このコラムでは、日本とアジアにおけるFTA活発化の現状、FTA増加の背景、FTAの経済効果および経済効果の数量的評価方法について見ていきます。

**アジア諸国でもFTAが増加中**  
 世界的なFTA増加の潮流に対し1990年代まではアジア諸国はFTAには消極的でした。しかし、2002年11月に中国とASEANが将来のFTA締結で基本合意したことを契機にアジア諸国のFTAに対する関心は一挙に高まったといえます。中国は2001年にWTO (世界貿易機関) に加盟して以降、まずASEANとの経済関係強化に乗り出し、2010年までに中国・ASEAN自由貿易地域を創設することを合意しました。その後、香港、チリ、パキスタンと矢継ぎ早にFTA締結を行ったほか、オーストラリア、ニュージーランド、南部アフリカ関税同盟、湾岸協力理事會などとFTA 締結にむけて現在交渉中です。アジアでは中国のほか、韓国やASEAN諸国の中でタイとシンガポールが2国間FTAの締結に特に積極的です。

**日本のFTAの基本方針**  
 日本は1990年代まではWTOによる多国間の貿易自由化体制に拘って来ましたが、2000年代に入ると主にAPEC (アジア太平洋経済協力) 加盟国、なかでもアジア諸国を主たる対象にFTA締結の動きを活発化させてきています。日本のFTAの基本方針は、関税やサービス貿易障壁の削減・撤廃だけでなく、協定締結国間で経済取引の円滑化、経済制度の調和、協力の促進等、2国間の市場制度や経済活動の一体化のための取組も含む対象分野の幅広い協定を目指しており経済連携協定 (EPA) と呼ばれています。FTAに加えて、投資ルールの整備、人的交流の拡大、競争政策の調和、知的財産制度の調整、環境政策など広範囲の分野で、モノ、ヒト、カネの移動の障壁を緩和するため2国間で包括的な幅広い経済関係を強化することを狙いとしています。2002年11月、シンガポールとの間で包括的経済連携協定を発効させたのが第1号で、その後2005年にメキシコ、2006年にマレーシアとフィリピン、2007年にタイ、ブルネイおよびチリとの間で相次いで交渉を実現させてきています。またインドネシア、ASEANとは大筋合意しているほか、韓国、ベトナム、インド、オーストラリアおよびスイスとも締結に向けて現在交渉中です。

**FTA増加の要因**  
 世界的にFTAが増加している理由はいくつか考えられますが、まずWTOによる多国間貿易交渉が先進工業国・発展途上国間の利害の対立、農業部門の自由化交渉難航、グローバル化に反対する環境団体やNGOの反対行動などから合意の形成に多大の時間を要している事情が重要です。これに対しFTAの場合、貿易や産業構造の面で相互に補充関係 (あるいは競合関係) にある国同士で比較的短期間で、

## 私の履歴書

## 高原 一隆

経済学部地域経済学科教授 [ 地域経済論 ]  
[ たかはら かずたか ]

**経歴**

- 1947年 広島県西条町 (現東広島市) に生まれる
- 1970年 愛媛大学文学部人文学科
- 1978年 立命館大学社会学研究科博士課程単位取得
- 1981年 札幌商科大学 (現札幌学院大学) 商学部助教授
- 1999年 広島大学総合科学部 / 社会学研究科マネジメント専攻教授
- 2003年 北海学園大学経済学部教授 - 現在に至る

**主な研究業績**

- 共編著『地域問題の経済分析』大明堂、1986年
- 共編著『人間復興の地域社会論』自治体研究社、1995年
- 共著『開発と自立の地域戦略』中央経済社、1997年
- 単著『地域システムと産業ネットワーク』法律文化社、1999年
- 共編著『地方都市の比較研究』法律文化社、1999年
- 共著『地域ルネッサンスとネットワーク』ミネルヴァ書房、2005年
- 共著『北海道再建への戦略』北海道新聞社、2007年

ゼミ生と沖縄調査旅行 (2006年11月)  
沖縄県読谷村にて

**生まれは広島県の田舎町**  
 生まれたのは、中国山地の最西端に位置する広島県の西条町である。平成の大合併で現在は17万人余りの都市となっているが、私が16歳まで過ごした西条町は本当に田舎町だった。酒造会社が建ち並び、いつでも買えているが、酒の匂いがその周辺にプーンと漂っていた。町を一步抜けると、小高い丘とつうそうと木々が茂った山地と田んぼばかりであった。その後、大企業の工場や研究所が立地するようになり、広島大学が移転するなどして「開発」が進み、現在では街は一変した。JR西条駅以外は全く昔の面影が亡くなってしまった。小学校も移転し、私が過ごした公務員宿舎もすっかり一新し、住んでいた家がどこにあったかもわからない位である。この町は道路網も自然風景自体も一変してしまっ

**学校は平等な条件こそ大事**  
 私の母は、その後の「教育ママ」の走りであった。私が行くべき学区の小学校は、住んでいた公務員宿舎の近くにあったのだが、母は、田舎の学校は教育水準が低いとばかりに、町 (とと言っても、2万人余りの人口) の中心部であった西条小学校に私を入れたのである。「教育ママ」の面目躍如と言うべきが、私は中学も高校も地元の学校ではなく、広島市内の学校に通った。今て言う「中高一貫教育」の私立学校である。典型的な進学校で、今から40年前だが、約420名の同級生のうち大学に進学しなかったのは2 3名であった。断つておろぐ、経済的には決して裕福であったわけではない。父親は結核で10年余り療養生活をしており、母親の内職で学校に行かせてもらったといっても過言ではなかった。

西条から広島までは36 だったが、国鉄 (現 JR西日本) 山陽本線で当時は1時間 (現在は26分に短縮) だった。広島駅に降りて学校までさらに市電で25分かかったのが、毎朝、6時には起きなければならなかった。汽車 (蒸気機関車) の本数も少なく、帰日も1本乗り遅れると、自宅に着くのは19時過ぎになった。ただ、車中では中高校生活において大事な時間であったと思う。他のクラスの通学者とも仲良く、テストや教師に関する情報交換をしたり、いつも同じ汽車に乗り合わせる女子高校生にほのかな気持ちを抱いたり……。高校時代の担任の先生が卒業に際して言ってくれた忘れられない言葉がある。「君たちは6年間男子の学校で過ごしたため、女性を理想化してしまう傾向がある。だが現実には厳しい、女をよく見極め、騙されるな」と。後で知ったのだが、「一流大学」に入学したが、「女に騙されて」未来を台無しにした卒業生がいたらしい。最近、「中高一貫教育」とか学校の「選択制」が教育「改革」なるもの一つとして議論され、一部は実践されているが、私は、1960年段階で既に「中高一貫教育」とか学校の「選択制」を経験していた。私は自分の経験から、これらは決して教育「改革」とは思わない。歪んだエリート意識をもち、社会の底辺で苦しんでいる人達のことを見ようとせず、自己利益に対しては一人倍主張し、後のことは全く考えない、そういう人が増えるだけではないかと思う。今大事なのは、社会を幅広く総合的に見極める力を持った人材ではないだろうか。

**経済学への志向 - 社会的平等を求めて -**  
 大学時代はご多分に漏れず、学生運動に大きな影響を受けた一人である。高校時代から、象徴といえ天皇制に疑問をもっていた。天皇という「尊い」人がいるということは、逆に見れば、「卑しい」人がいるということではないのか。「尊い」「卑しい」は近代にはなじまないものであり、「人間の能力」「努力」こそ出発点に置かれるべきだ、というのが当時の私の考えであった。そこへもってきて、「労働に応じた分配」を原則にする考えの社会主義思想、その原理を提起したマルクス主義が現れたものだから、

たちまちそれへの問題意識をかき立てられた。大学自治会の役員をやったこともあるが、3年生の終わり頃になると、自分にはこうした運動や実践は余りなじめないことを感じ始め、4年生になって就職活動を断念し、大学院進学を模索し始めた。

とはいえ、四国・松山の片田舎の大学だったから、経済学の勉強を共にしようとする仲間はいなかった。現在でこそ、大学院重点化政策のため、院生の確保が大変であるが、当時は全く事情が違っており、大学院進学は研究者への道 (特に文系) であったから、入学試験は並大抵のものではなかった。4年修了した時点で先輩に誘われて大阪に行き、地域新聞づくりに関わったり、京都大学の教授が中心になって運営していた民間の経済学の研究所のお手伝いをしたりしながら大学院入試にチャレンジした。しかし、松山の田舎にいて、経済学の基本的な勉強をしていなかった私に合格の微笑みはもたらされなかった。当時の文系の大学院の定員はどこも「若干名」だったから倍率は10 20倍であった。第一志望の京大経済学研究科は合格しなかったが、やむを得ず受験した立命館社会学研究科には合格することができた。なぜ経済学研究科ではなく、社会学研究科だったかと言え、立命館経済学研究科のプライドが入学試験を京大経済学研究科と同一にしていたからである。当時の立命館社会学研究科には、社会学だけでなく経済学や歴史学などユニークな教授がいた。ここを勧められたのは大学院入学後に指導教授となった故遠藤晃氏であった。遠藤教授の下で都市問題と地方自治問題を、修士課程2年間、博士課程3年間でつとめてきた。寧ろ指導で充実した大学院生活を送ることができた。

**札幌での研究・教育**  
 精神的には暗かった3年間のポストDCを経て、1981年に札幌商科大学 (現札幌学院大学) に地域経済論担当助教授として採用されたことから、その後の私の生活は大きく変わった。寒くて大変な地域と思っていた札幌が予想外に快適で、開放的な風土にも引かれ、研究を通じる様々な人間関係もでき、比較的順調な研究・教育生活を送ることができたと思う。その後、広島大学に移り、そして地域経済学科の発足と同時に、再び札幌にある北海学園大学で教鞭をとることになり現在に至っている。

**学生諸君に - 苦勞を厭うとツケがくる -**  
 私の時代の経験の押しつけにならないことに注意しながら、学生諸君に幾つかアドバイスしておきましょう。一つは、「すべての事柄を疑え」です。ゼミでも講義でも、そして勉強以外のことで、何に対してでも「なぜ?」という問いかけを忘れないことです。第二は、人生は、つらく苦しいこと3割、楽しく感謝すること1割、あとはどちらとも言えない、という割合です。若いときに、つらく苦しいことを避けることができても、人生の中で必ずツケは来ます。それを忘れず、チャレンジすることが大事だと思います。第三に、歴史を大事にすることが、諸君は、歴史なんて昔の出来事、と思っているかも知れませんが、現在は過去の、未来は過去と現在の積み重ねの上にはか生まれません。過去や現在と全く関係のない未来が突然生まれることはあり得ないのです。第四は、物事を総合的に理解して欲しい、ということ。例えばインターネットは人類の発明した貴重な財産だし、それを縦横に駆使する能力を身につけることは大事です。しかし、インターネットばかりに依存してしまうと、断片化した人間になってしまうことでも忘れないで。第五に、何に対しても常に自分の意見を持ち、それを発言できることです。知らない事柄に対してはその知識を自分で得ることです。「知は力」なのです。もちろん、自分の意見を主張すること自分勝手に行動することは別問題です。

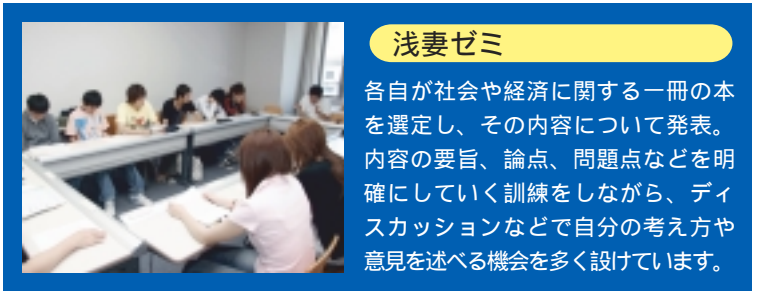


高校と違い、大学には基本的に決まったクラスというものがないので、最初は、ちょっと戸惑いました。何しろ、幼稚園から高校まで、常に顔見知りクラスメートという環境でしたから。入学当初、ちょっと孤独感を味わったりして。しかし、基礎ゼミが始まり、そんな不安も解消。週に一度のゼミなのですが、同じテーマについている意見を交換し合うこともあり必然的に親しくなりました。ゼミ対抗のソフトボール大会があり、大会に向けてみんなで練習に取り組み、短時間でわりと強い仲間意識も生まれました。

浅妻ゼミは、各自が社会問題に関する本を一冊選び、それに対してレポートを作成して発表するという方式で進められています。私の選んだ本は「安全な空気を取り戻すため-排気ガスの危険性」に関するもので、現在、それを読み込み、発表の日に向けてレポートを準備中。本の要旨をまとめ、問題点を出し、自分なりの意見を述べるというようなことは、これまで経験したことがなかったので、悪戦苦闘しています。しかし、先生からの適切なアドバイスもあり、発表までにはなんとか形になりそうです。大学教員といえば、これまで遠い存在のようにイメージしていましたが、いろいろなことで気さくに相談にのっていただけるなど、仲間とともにとても良い雰囲気です。

**浅妻ゼミ**

各自が社会や経済に関する一冊の本を選定し、その内容について発表。内容の要旨、論点、問題点などを明確にしていく訓練をしながら、ディスカッションなどで自分の考え方や意見を述べる機会を多く設けています。



**仲間** 向 貴生（むかい たかき） 弟子屈高校出身

話し合ったり、ソフトボールの練習をしたり、高校時代とは、ひとあじ違う仲間意識が生まれる。



**充実感** 小田 悠（おだ はるか） 倶知安高校出身

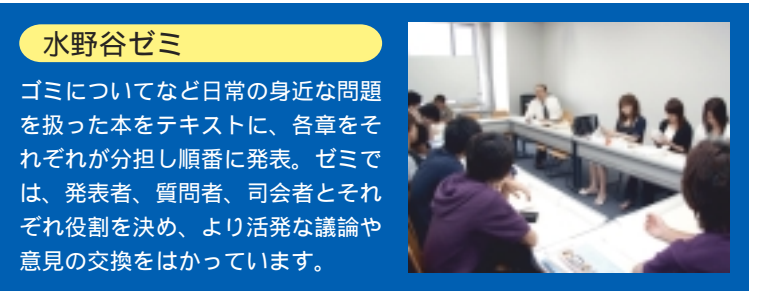
慣れない資料集めやグラフの作成、徹夜明けの発表当日。でも、ヤッターっていう充実感も。

ゴミに関する一冊の本をゼミ生それぞれが章ごとに担当し、その章の内容についてレポートを作成して順番に発表していくというのが、所属する水野谷ゼミの進め方です。その順番が、なんと発表初日の2番手となり、大いに焦りました。それまで本格的なレポートを書くことも、それを人前で発表し質問を受けたりすることも未経験。同じ日に発表予定となっているゼミ仲間と連絡を取り、レポートの内容や進行状況を確認しあったり、前日には徹夜をしてレポートをまとめ、当日の朝から大学のパソコンルームで仕上げをしました。レポートの構成も、ただ本に書かれてある内容をまとめるだけではなく、それに関連する資料やデータを集めてグラフを作成したり、自分の考察や意見なども付け加えるなど、大学での勉強方法が少し理解できたような気がします。発表が終わった後は、今までになかった充実感を覚えました。

具体的な内容は、ゴミから派生する公害や伝染病などについてですが、ふだん日常でそこまで意識していなかったゴミについて、少し深く理解することができ、地球環境と日常とが深くつながっていることを実感。普段でも実際のニュースなどを交えての講義が多く、毎日の暮らしと経済学の関係がほんの少し分かってきた今日この頃です。

**水野谷ゼミ**

ゴミについてなど日常の身近な問題を扱った本をテキストに、各章をそれぞれが担当し順番に発表。ゼミでは、発表者、質問者、司会者とそれぞれ役割を決め、より活発な議論や意見の交換をはかっています。



ゼミは仲間はもちろん教員とも親しくなれる場

**水野谷ゼミ**

大学での勉強方法が、少しずつ分かってきた



## 経済学部インプオ ゼミ対抗ソフトボール大会

6月...それは多くの経済学部ゼミ生にとってソフトボールの季節なのです!というも、毎年ゼミ対抗でソフトボール大会が開催されるからです。多くのゼミは大会に合わせてゼミの仲間と練習したり他のゼミと練習試合をしたりして大会前から盛り上がっているくらいです。今年は6月14日から4日間の日程で大学近辺にある月寒公園坂下グラウンドで行われました。この大会は学生によって企画・運営されている、学生手作りの大会です。今回の大会にはなんと66ゼミが集まりました。1年生の基礎ゼミからおよそ30ゼミが参加しており、大学生活に慣れない新入生にとって、この大会は良い「息抜き」でありゼミの仲間と仲良くなる場となっています。4日間にわたって66チームがトーナメントを戦った末に決勝で対戦したのは北倉ゼミと西村ゼミでした。決勝戦は白熱したゲームとなりました。5回裏まで北倉ゼミが6対0と一方的にリードしていましたが、西村ゼミは最終回の7回表に1点差まで追い上げ、一逆転のチャンスを迎えます。しかし、北倉ゼミのピッチャーから繰り出される緩急と高低をつけた巧みな投球に最後は打ち取られてゲームセット。北倉ゼミが6対5で優勝し、この大会の名物である豪華賞品が贈られました。なんと北倉ゼミは昨年に続き二連覇でした。来年は打倒北倉ゼミめざしてみんなで盛り上がる!



# これが基礎ゼミだ!

自分で研究テーマを設け、調べ、考察し、レポートにして発表し、教員や仲間の意見を聞きながら、一つの研究成果をまとめあげていく。ゼミナール活動はいわば、最も大学らしい学問の場。その序章ともなる経済学部の基礎ゼミとは?今まさに基礎ゼミ体験中の学生たちに、その様子を聞いてみました。

- 基礎ゼミで使われているテキストの例
- 家田慶子『18歳からの教養ゼミナール』
  - 伊藤元重 編者『伊藤元重の経済がわかる研究室』
  - 鈴木正俊『経済データの読み方』
  - 隅谷三喜男『大学でなにを学ぶか』
  - 竹中平蔵・佐藤雅彦『経済ってそういうことだったのか会議』
  - 橋本俊昭『家計からみる日本経済』
  - 鶴田満彦 編『入門経済学』
  - 根井雅弘『物語現代経済学』
  - 八木昭道『新版 ごみから地球を考える』
  - ベネッセ・コーポレーション編『My Career Note Navigation』
  - 北海道スロフド協会 他編『北海道のスロフド運動』
  - 本多由紀『「ニート」ってどういう?』
  - 山田真哉『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』

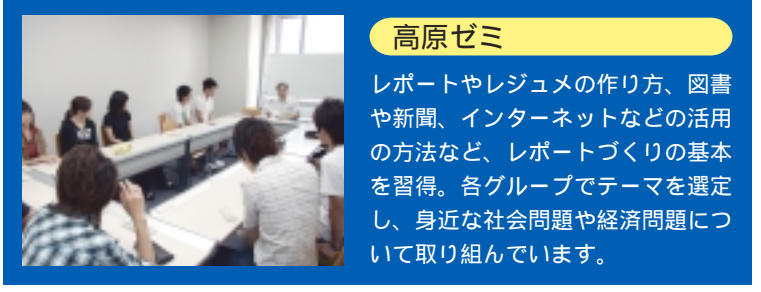
毎朝、7時に自宅を出て、電車と地下鉄を乗り継ぎ、一講目の講義から午後の遅い時間に設けられている科目が多い教職課程までを受講して、午後7時ごろに帰宅という日々。勉強づくしで、ちょっときついなと感じたこともありますが、今ではそのサイクルにも余裕(?)が生まれ、サークル活動や遊びの方にも手を伸ばしています。そんな、多忙なかでも基礎ゼミは、特に充実した時間です。

最初の教時間、レポートや\*レジュメの作り方、図書やインターネットでの情報や資料の集め方、その活用方法など、研究の進め方の基本を学びました。その後、グループごとに具体的なテーマを設定して、調査・研究に取り組んでいます。私たちのグループのテーマは「いじめ」について。近年、注目されている重要な社会問題でもあり、それが起こっている現状と年齢に近い私たちにとって、とても身近な問題です。また、将来、教師を目指している自分にとって、ぜひ取り組んでみたいテーマでもありました。レポートをまとめたり、発表することはもう少し先ですが、以来、新聞やテレビなどで報道されるニュースやドキュメント、ドラマなどの見方が変わってきたように思います。基礎ゼミが、自分の好奇心と勉強の幅を広げてくれていると実感しています。

\*レジュメとは フランス語で「摘要、大意」という意味。ゼミや講義、セミナー、研究会などで発表するとき、その発表内容をより分かりやすく伝えるために簡潔にまとめ、資料として配付するものです。

**高原ゼミ**

レポートやレジュメの作り方、図書や新聞、インターネットなどの活用の方法など、レポートづくりの基本を習得。各グループでテーマを選定し、身近な社会問題や経済問題について取り組んでいます。



**好奇心** 河上 彩乃（かわかみ あやの） 江別高校出身

大学生活は、好奇心全開で超多忙。将来のためにも、身近な問題にチャレンジ!



**出会い** 嵯峨 和幸（さか かずゆき） 札幌平岡高校出身

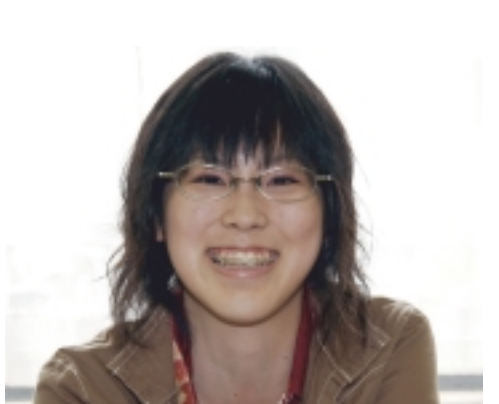
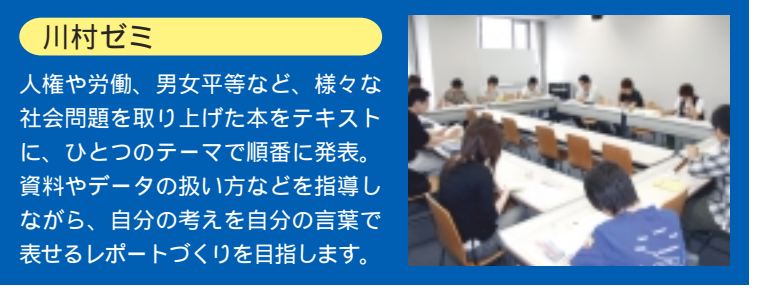
自分の意見を持つとともに、さまざまな考え方や意見と出会えることはとても楽しい。

入学からこれまでの大学生活の印象は、時間の流れがすごく速いということ。新しい環境の中で、初めての体験や出会いがいっぱいあって、目まぐるしく毎日が過ぎていくという感じです。それだけに、充実した時間を過ごせていると思っています。そんな中でも基礎ゼミは、とても気に入っている授業のひとつです。

私が所属する川村ゼミでは、さまざまな社会問題を紹介した本をテキストとして、各自がひとつの問題やテーマをまとめ、発表し、質問や意見、感想を述べようという内容です。そこで実感したのは、自分なりの考え方や意見を持つことの難しさ。今日では、インターネットからでも、手軽に大量の情報を手に入れることが可能です。でも、そこには間違った情報も多くあり、全てを鵜呑みにするのはとても危険です。どの情報が正しいかの判断と、それに対する自分なりの意見を持つことの重要さ。あることを人に説明したり、人と意見を交換するには、自分なりの解釈のしかたや意見を持たなくてはいけないと思います。ひとつのことで、人それぞれに違った考え方や理解のしかたがあります。基礎ゼミは、自分の考えを人に伝えることの難しさ、違った考え方や意見と出会う楽しさを教えてくれる最良の場だと感じています。

**川村ゼミ**

人権や労働、男女平等など、様々な社会問題を取り上げた本をテキストに、ひとつのテーマで順番に発表。資料やデータの扱い方を指導しながら、自分の考えを自分の言葉で表せるレポートづくりを目指します。



新聞やテレビなどの見方が変わってきた

**川村ゼミ**

意見交換の場では、自分の意見をはっきり持たなくては

